

対人支援点描 (14)

「当事者という存在」

小林 茂 (臨床心理士/牧師)

はじめに

短信にも記したことだが、使用する携帯電話がガラケーからスマートフォンに変わって、生活のなかで変化したことが SNS をするようになったことがある。等の昔に SNS を始めた人には、今更その話と思うかもしれないが、使い始めると、遠方のために疎遠になっていた友人、知人との交流が再開されたり、投稿するため日常生活のささやかな感動に意識するようになった。

その最中で、以前勤めていた福祉事業所に通所していた青年の投稿に心動かされた。本人にシェアしても良いという承諾をいただいたので引用したい。

1. ある青年の福祉に対する怒りの思い

「否定するつもりはない

非難するつもりもない

色んな人がいて

色んな背景があって

色んな野望があって

色んな生き様があって

そうやってこの世界は成り立っている

けどよ、

福祉、福祉ってあちこちで蔓延ってて

うるせーよって話

ビジネスとしての福祉があるのもよく知ってるし

それによって生きていける人たちがいるのもよく知ってる

人を応援したり

助けたり

自分にしかない能力や才能をもって

人に寄り添う事に対して

対価を支払ってもらうのは

いいと思うし

俺もそれに似た感じで飯を食らってる

だからそれはそれでいいんだ

けどよ、

最終的に自分自身の足で立って

テメエの人生をテメエで決めるってのが

テメエの命に対しての

最高の感謝と

生きるって事なんじゃねえかなって思っ

て生きてると

疑問を感じるんだよ

この日本で謳われてる福祉ってのに

〇〇してあげる

っていう言い方が

どうも気に食わねえ

生きる上で支え合うことは必要不可欠だ

けど
ある日突然
お前は障害者(児)だからまともに生きられるようにしてやるよ
なんて事を
なんの躊躇いもなく言われたらどうだ？
そんなのが福祉とか応援って言えんのか？？
俺は到底思えねえし
こういう事に対しては殊更腹が立つ
そろそろ
増えすぎた福祉を
ふるいにかける必要があるんじゃないかねえのって思ってるわ」

2. 障害者の置かれた立場と自意識

この投稿に対しての返事は、彼を知る仲間たちから「いいね」「超いいね」という支持を集めた。もちろん、もともとフォローと呼ばれる仲間たちという彼を知る特定の人たちの間でのことだから、正面切って反論や、異論を展開しないのかもしれない。しかし、私の前職場で最初に福祉の現場との出会いから現在まで、彼は一貫して自分が支援者と被支援者という関係に上下関係や、自分が利用されるという違和感に正直に拒絶反応していた。衝動のコントロールがうまくいかないのに無理して自制するあまり、解離を起こしたり、気の許せる人を意識して自分を偽って「粹」に収まろうと努力したりしていたことを思う。結局、私の前職場のある地域から飛び出し、これもまた不思議な結びつきで私の郷里の県に住むことになり、今に至っている。

その青年が結びついた福祉関係の支援者が、彼の信頼できる人となって、その地域を盛り立てている。

私の前職場のある地域には、全国から、そこに住みたいと言ってやってくる人は多いが、現実を知って離れたくても離れる力がない人も多い。その中で、その青年には力とうか、エネルギーがあった。昔の社会や人間のあり方を音楽にぶつけたロッカーのような根性があったと感じている。

そのような青年の訴えが、先に紹介させていただいた投稿の文章である。

この思いと似た訴えが、本人が人を選別するのに、「あなたは当事者の方ですか？」という問いかけと自意識である。自分と相手をどう位置づけるか、この問いかけには、どこかその人のなかにある相手が支援者か、支援業界の人か、そういった警戒感にも似た慎重さが含まれている感じがする。もう少し言い換えれば、自分の仲間か、そうでないか。もしくは、気の許してよい人か、許してはいけないか、という判別するリトマス試験紙のような言葉である。

いつのころからか、いつの間にやら、福祉業界を始めとする支援者が障害者や当事者から警戒され、「してあげる」「される」という違和感に陰性感情が持たれるようになっていないのか。

3. 当事者という存在

本来、「当事者」とは、何かしらの問題に巻き込まれた当人を示す意味であるが、福祉業界に至っては「当事者」とは障害を抱えた本人であったり、その家族を示す記号となっている。さらに、当事者主権という権利擁護の立場から、当事者とは自らの主体性を含めた概念であるはずである。このことは、単に障害や病があるから、誰でも当事者であるとは言

えないということを示す。本来は、そういうことなのだと思う。

けれども、これが「障害者」＝「当事者」というなかで、これが上下関係であったり、「してあげる・してもらう」といった一方通行の関係を示すようなものならば、これは見直さなければならない問題であるといえる。

障害者や当事者の痛みとして、ふつうに自身の尊厳を訴えているのである。時として障害者や当事者が「してもらって当然」という逆の上下関係を持っていたとしても、そのようにしてしまったのも、やはり同じ根がある。古い表現であるが、ネガポジとして対象となったに過ぎない。

この課題への挑戦が問えないならば、投稿の引用を許してくれた青年が訴えるように、「そろそろ増えすぎた福祉をふるいにかける必要があるんじゃないの」という言葉は、確かな現実のものとしてあるのだと思う。